はじめに

「受験古文」の最終目標は、**「初見の古文の文章を辞書なしで読めて、問題が解けること」**です。
そのために必要な三つの要素は、**「文法・単語・読解のルール（古文常識・作品常識含む）」**です。
三つの要素のうち、「文法」と「単語」が古文の土台となるところです。
「古文ができない」、「読めない」という人のほとんどは、この「文法」と「単語」がきちんとできていません。
この講座は、その土台の一つである**「文法」をしっかり身に着けるための講座**です。

本講座は**「ベーシックレベル」**ですが、「基本だけ学ぶ」という意味ではありません。
基本から説明をして、実際の大学入試の文法問題も解けるように構成しています。

他レベルの『文法講座』との大きな違いは、
- **各チャプター時間が短時間**〔チャプターの途中で集中力が切れてしまわないように。〕
- **用例ごとの例文が豊富**〔なるべく有名な文章から取り上げました。学校の授業で見かける文もあるはず。〕
- **問題数が多い**〔同じような問題でも、たくさん実施することにより、より記憶に定着させるため。〕
- **大事なことは繰り返し説明**〔何度も同じことを聞くことにより、自然と復習していることになる。〕
- **丁寧にじっくり解説**〔わかる人には冗長に感じるかも。ですが、**「ゆっくりじっくり確実に！」**の姿勢で。〕

あとは、テキスト解説部分の文字も大きく読みやすくしています。

他の文法講座より講数が多いのは、前述（例文・問題数が多いが、じっくり解説）の理由からです。
よって、身に着く内容は「ベーシックレベル」でも、他の文法講座となんら違いはありません。
全30講をきちんと仕上げたとき、大学入試文法問題を解く力はもとより、
大学入試レベルの文章を読むための土台の力も、十分についています！

現時点で「古文なんて、何書いているのかさっぱりわからないから大嫌いだ」という人は、なんの問題もありません。
一番恐ろしい勘違いは、「古文なんて日本語なんだから、勉強しなくてもどうにかなる」と思ってしまうことです。
断言しておきますが、勉強しておかないと、絶対にどうにもなりません。
「古文＝日本語」だと思っている人がいるならば、**「古文＝外国語」**だというくらいイメージを変えましょう。
ただし、**コツさえつかめば**、外国語を学習するよりも**ずっと簡単に、ずっと楽に「点取り科目」にすることができる。**
それが、古文のオイシイところです。

本講座で文法のコツをしっかりとつかんで、是非、古文を得点源の科目にしましょう！

ベーシックレベル　古文＜文法編＞

予復習・授業の受け方について

予習は一切不要です。
ノートも不要です。
テキストと筆記用具さえあれば大丈夫です。
テキストへの書き込みで授業をすすめていきます。

テキスト中に〈**例題**〉や「**問題**」がありますが、講義中に問題を指定しますので、該当問題を適宜解いてください。

講義を見終えたら、復習を必ずしてください。
特に**太字**や**空欄に自分で書き込んだところ**に重点を置いて、覚え込むまで何度も復習してください。

復習が終われば、各パートの後ろにある「**確認問題**」を解きましょう。
確認問題は何度でもできるように、答えは直接書き込まないようにしてください。
万一間違えた場合は、テキストの該当箇所に戻って復習をしてから、再度「確認問題」を解き直しましょう。
記憶を定着させるツールとして、何回でも使用してくださいネ！

ベーシックレベル　古文＜文法編＞

目次

第16講　2つの「なり」…… p.6
第17講　なりの識別／めり・らし／推量・推定の助動詞まとめ…… p.22
第18講　係助詞・間投助詞…… p.44
第19講　接続助詞・「て」の識別…… p.68
第20講　の・が（格助詞）…… p.90
第21講　して・より・にて（格助詞）…… p.108
第22講　終助詞・識別（ばや）…… p.118
第23講　副助詞・識別（し）…… p.130
第24講　識別（なむ）…… p.146
第25講　識別（に）…… p.158
第26講　呼応の副詞…… p.178
第27講　敬語の種類・本動詞と補助動詞…… p.196
第28講　補助動詞2つの給ふ…… p.216
第29講　複数種類を持つ敬語…… p.224
第30講　敬意の方向…… p.236

〈Memo〉

PART1　断定・存在／伝聞・推定の「なり」

2つの「なり」

（例）この男は王**なり**けり。

接続	基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の型
	なり **（断定・存在）**							型
	なり **（伝聞・推定）**	○					○	型

★断定の接続に関して

●形容詞型に接続する場合

「〜**き**＋なり」となる。

（例）申すべき**なら**ねど、…

●一部の副詞や助詞にも接続する。

「ばかり**なり**」
「〜ば**なり**」
「かく**なり**」
「さ**なり**」
「しか**なり**」
の「**なり**」など。

（例）七里ばかり**なり**。／わざと**なら**ぬにほひ、…

★〈「存在・断定」の「なり」の語源と見分け方〉

語源＝「　　」＋あり

① **存在**（～にある・～にいる）

※「　　」**（方角）**＋**なり**

（例）

駿河**なる**宇津の山べの…

壺**なる**御薬…

② **断定**（～である）

※①以外

（例）　行きかふ年もまた旅人**なり**。

★〈「伝聞・推定」の「なり」の語源と見分け方〉

語源＝「　　」＋あり

①　**伝聞**（～とかいうそうだ）

※人から聞いた噂などの場合

（例）　また聞けば、侍従の大納言の御娘なくなり給ひぬ**なり**。

②　**推定**（～ようだ）

※「音」に関わる言葉がある場合

（例）　松虫の声す**なり**。

問一　次の傍線部の文法的意味を答えよ。

①　今年蔵司の小使にてまかり渡り候ひつるなり。

②　舟の内なる者ども、これが仕業を見るに、…

③　人々あまた声して来なり。

④　親の為思はぬなり。

問二　「仙人などもかくこそすなれ。」の傍線部の文法的説明として最も適切なものを、次の中から選べ。

ア　断定の助動詞「なり」の連体形　　イ　伝聞の助動詞「なり」の連用形

ウ　断定の助動詞「なり」の連用形　　エ　伝聞の助動詞「なり」の已然形

オ　断定の助動詞「なり」の已然形

問三　「中ならん物はさながら取れ」の「なら」と同じ意味で用いられているものとして、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。（『竹取物語』）
イ　この西なる家はなに人の住むぞ、問ひ聞きたりや。（『源氏物語』）
ウ　三条の宮に、親族（しぞく）なる人の衛門の命婦とてさぶらひけるたづねて文やりたれば、（『更級日記』）
エ　都へと思ふをものの悲しきは帰らぬ人のあればなりけり（『土佐日記』）
オ　物思へば雲居に見ゆる雁（かりがね）の耳に近くも聞こゆなるかな（『和泉式部集』）

第16講　PART1　確認問題

① 「若君、姫君とぞ聞こゆなる。」の傍線部の助動詞の意味として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　現在推量　イ　過去推量　ウ　適当　エ　断定　オ　伝聞推定

② 「しかしか、いと興ある事なり。」の傍線部の文法的意味として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　完了　イ　推定　ウ　断定　エ　伝聞　オ　尊敬

③ 「京には見えぬ鳥なれば、…」の傍線部の文法的説明として最も適切なものを、次の中から選べ。

ア　伝聞の助動詞「なり」の未然形
イ　断定の助動詞「なり」の未然形
ウ　伝聞の助動詞「なり」の連用形
エ　断定の助動詞「なり」の已然形
オ　伝聞の助動詞「なり」の已然形

④「裏見の滝と申し伝へはべるなり。」の傍線部の文法的説明として最も適切なものを、次の中から選べ。

ア　断定の助動詞「なり」の連用形
イ　伝聞の助動詞「なり」の連用形
ウ　断定の助動詞「なり」の終止形
エ　伝聞の助動詞「なり」の已然形
オ　断定の助動詞「なり」の已然形

⑤「近く寄れば、消え失せぬなり。」の傍線部の助動詞と同じ意味で用いられているものとして、最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　それは、侍りし時のなり。
イ　遠うては見ゆなり。
ウ　行きかふ年もまた旅人なり。
エ　後(うしろ)かげの見ゆるまではと見送るなるべし。

解答

第16講　PART1　解答

問一　①　断定　②　存在　③　（伝聞）推定　④　断定

問二　エ

問三　イ

確認問題　解答

第16講　PART1　確認問題　解答

〔解説〕

① 傍線部は、助動詞「なり」の連体形（「ぞ」の結び）。「なる」の上が「聞こゆ」。「聞こゆ」はヤ行下二段活用の終止形。

② 「なり」なので、イ・ウ・エのどれかになる。「なり」の上が「事」＝体言。よって、ウが正解。

③ 傍線部は、助動詞「なり」の已然形。「なれ」は「鳥」という体言についているので、断定の助動詞。

④ 傍線部は、助動詞「なり」の終止形。上の「はべる」は「はべり」の連体形で、「なり」は断定の助動詞。

⑤ 傍線部を含む「消え失せぬなり」は、「消え失す」の連用形「消え失せ」＋完了の助動詞「ぬ」の終止形＋伝聞の助動詞「なり」の終止形、からなる。アは「の」という格助詞、ウは「旅人」という体言、エは文脈と「見送る」の連体形についていることから、断定の助動詞「なり」。イはヤ行下二段活用「見ゆ」の終止形についているので、伝聞の助動詞「なり」である。

〔解答〕

① オ　② ウ　③ エ　④ ウ　⑤ イ